絵具遊び活動―自由な表現を目指して―

野角　孝一[1)]，吉岡　一洋[1)]，藤戸　綾香[2)]，中山　美香[2)]
1）高知大学人文社会科学系教育学部門
2）高知大学教育学部附属幼稚園

Paint play activity―Aiming for free expression―

NOZUMI Koichi[1)], YOSHIOKA Kazuhiro[1)], FUJITO Ayaka[2)], NAKAYAMA Mika[2)]
1) Kochi University Research and Education Faculty, Humanities and Social Science Cluster, Education Unit
2) Kindergarten Affiliated with the Faculty of Education, Kochi University

要　約

絵画における子ども達の表現は、自然な躍動感があるものや、屈託のない自由な表現があり、魅力的な作品も多い。幼稚園等では絵を描くなどの表現活動が日常で行われ、その魅力を伸ばす言葉かけは基より、園児達が材料や技法に接する機会を作ることも重要である。本研究では特定のモチーフを設定しない絵具の遊び活動を通して、絵具や混色に慣れ、単なる上手な絵ではなく、園児たち自身が生み出す自由な表現の追求を目指す機会の創出を図る。

キーワード：園児、絵具遊び活動、表現

１．研究の背景

本研究は 2015 年から継続して行っている高知大学教育学部附属幼稚園の園児を対象とした絵具遊び活動の一環である。

伊藤・茂木（2020）は幼児期の絵を描くことや粘土あそびなどの造形表現活動の経験頻度と中学校美術科の授業における絵を描くことやものを作るなどの表現活動に対して抱く、好き嫌い・得意不得意の意識との関連について統計的に分析を行い、幼児期に「絵を描いた経験」の頻度が高いと、中学校美術科の授業において「絵を描くこと」に対して好きや得意などのポジティブな意識を抱きやすい可能性を示唆している。

さらに浜谷（2015）は絵を描くことの苦手な幼児の原因として「技量が不足して思うようには描けないと感じたり、上手な絵と比較して劣等感を感じたりする等で、大人になるまでに絵を苦手と感じるようになっていく。」と指摘しており、保育と幼児教育の現場の関りから、「絵を描くことに苦手意識を感じている子どもが多くなっていると同時に、そういう傾向が低年齢化しているのではないかと感じてきた。」と言及しており、苦手意識の低年齢化を指摘している。

絵を描く機会を作ることも大切であるが、園児達と絵との関わり方が重要であることは言うまでもない。

絵を描くことは本来楽しいことで、自由に描いて良いと考えられる。しかし、作品を完成させることを優先させているような事例が多く散見される。

幼児教育の現場や小学校などでは園児達や小学生が絵を描くことが大切にされているが、教室等で掲示された作品を見ると画一的で、ある一定の型通りに描くように指導していると推測できる作品を目にすることがある。

またその一方で、入園したばかりの年少児が砂遊びをあまりやりたがらないという話を附属幼稚園教諭から伺った。これはコロナ禍の影響もあり、無闇にものに触らないように普段から言われ、手指の消毒や手洗いの煩わしさが関係していることが窺える。砂に触れてはいけないという

ことを直接的に言われていないだろうが、園児達も無意識に手が汚れることを避け、様々なものに触れる機会が減っていると考えられる。

また、幼稚園教育要領（2018）において、幼稚園教育の内容である「環境」の領域に示されているような、身近な環境との関わり方について問われている時代とも言える。

以上の状況を踏まえ、本研究では絵具を用いた制作を行う。型にはまった表現ではなく、園児達が絵具に直に触れ、より自由な表現を追求できる環境を設定する。

２．研究の目的

筆者らはこれまでの経験で、家庭では園児達は絵具を使用する機会は少なく、幼稚園での活動で初めて使用する場合が多くある。

園児達が絵具や制作に対して構えてしまうことを避けるため、本研究で行う絵具遊び活動は基本的に特定のモチーフを設定していない。それはあるモチーフに対するかたちや色における類似性の評価などを行ことが目的ではなく、園児達自身がのびのびと自分なりに混色した絵具で制作を行うことを目的としているからである。また、絵具の混色ばかりではなく、絵具そのものの感触に慣れてもらうことも目的の一つとしたい。

さらに、1 枚の作品を完成させたかどうかを決めるのは園児自身であることを大切にする。大人の目で見て良いと感じ、そこで制作を止めたくなることは筆者の経験上、よくあることである。しかし、それは園児の意志ではなく、大人の一方的な判断である。絵具遊び活動では園児自身が考え、思いつくことをやり終えたと判断した場合に完成となる。

３．研究の方法

附属幼稚園との打ち合わせの中で、2022 年度は年少組、年中組、年長組のそれぞれの年間の活動日を決定した。また、年少組についてはより活動日を設けて、入園したばかりの園児達に絵具を扱う機会を増やすために、1 学期についてはアートの日として毎月 1 回の絵具遊び活動を行うこととし、2 学期は他の行事が多く入っているため、1 学期よりも活動日は少なく設定している。本研究では年少組を研究対象とし、全ての絵具遊び活動ではなく、【表 1】に示したように、特筆すべき活動を抽出して検証していく。

【表 1】年少組のアートの日

日程	内容
5 月 20 日（金）	活動①：なにができるかな～野菜スタンプ～
6 月 3 日（金）	活動②：どんな形ができるかな～フィンガーペインティング～
6 月 10 日（金）	活動③：とろとろえのぐで版画をしよう～フィンガーペインティング～
10 月 28 日（金）	活動④：大きい紙に思いのままに描こう

制作の内容については、大学教員と年少組の附属幼稚園教諭が事前に打ち合わせを行う。活動後すぐに園児達の制作の様子を検証する中で、次回の活動のおおまかな内容を両者で決定する。決定した内容について、幼稚園教諭が活動計画書を作成して絵具遊び活動に臨むという流れで研究を進めた。

尚、本論の写真の掲載については園児および保護者の承諾を得ている。

３．１　絵具遊びの実践：活動①

最初の絵具遊び活動①の内容として、「なにができるかな～野菜スタンプ～」を設定した。その理由として、絵具に野菜を介して触れるため、最初は絵具に直接触れることがなく、制作しやすいと推察したためである。また、絵具遊び活動では園児自身の考えを大切にするため、使用する画用紙も余分に用意し、園児の意志で何枚も制作できるように準備した。

準備物：野菜（玉ねぎ、オクラ、人参、マッシュルーム、ピーマン、ヤングコーン、レンコン）、絵具（白、黄、赤、青、緑）、スポンジ、絵皿、画用紙（八つ切り）、机、雑巾、乾燥棚

スポンジを入れた絵皿に絵具を出し、園児達が興味を示すのを待ってから、幼稚園教諭が野菜を切り、「この野菜は何ていうか知っている？」など、園児達との会話の中で野菜スタンプの実演を行った。園児達の実践では野菜と絵皿を分散して配置したため、絵具や野菜の交換が行いにくく、同じ野菜で同じ色のスタンプを用いて制作する園児が初めは多かった。しかし、大学教員がすでに別の色がついた野菜を入れ替えたことによって、一度のスタンプで色が混ざり合うようになった。それに気づいた園児たちが、意図的に様々な色を変え、スタンプによる色の変化を楽しんでいた。野菜を描く道具として捉え、具体的に何かをイメー

ジして描く園児もいたが、スタンプによる痕跡を楽しむ園児が多かった。また、準備した画用紙がなくなるほど、園児達は積極的に制作している一方で、例年は意図的に指や手に絵具を塗布して、ゾンビ手をする園児達が多いが、本活動ではそういった園児は少なかった。
これは前述の通り、コロナ禍の影響により、砂遊びなど手が汚れる遊びをする園児が少ない傾向にあるという推察に合致するものであった。しかし、絵具に慣れてきたためか、使用した絵皿などを園児達が率先して洗う様子が見られ、絵具を水で流しながら、「色が変わったよ！」と、変化する水の色に着目している様子が見て取れた【図1】。

制作後の附属幼稚園教諭と大学教員との意見交換では、たくさんの野菜スタンプを行って、「花火」「しゃぼんだま」と発言している姿や、指を使ってスタンプを行い、「卵」と発言している園児などがおり、押されたスタンプの跡を別のものに見立てる場面や絵具を直接指で触れている場面が見受けられ、若干であるが絵具に慣れた様子が窺えた。

それを踏まえ、活動②はフィンガーペインティングを題材として設定し、活動③は糊を混ぜた絵具を用いた版画を行うこととした。フィンガーペインティングによって、指で絵具に触れることに対する抵抗感をなくし、糊を混ぜた絵具を用いることで、絵具のぬるぬるとした感触を楽しむことをねらいとした。

【図1】野菜スタンプで色の変化を楽しむ様子

3．2　絵具遊びの実践：活動②

前述の通り活動②は「どんな形ができるかな～フィンガーペインティング～」と題し、フィンガーペインティングを題材として設定した。活動①において、絵具に直接触れる園児が若干見られたため、より絵具に親しむように設定した。

準備物：絵具（白、黄、赤、青、緑、紫）、絵皿、ビニール袋、画用紙（八つ切り）、机、雑巾、乾燥棚

前回と同様に絵具の準備を早めに登園した園児達と行い、「早くやりたい！」という発言があったように、園児達の制作に対する気持ちの高まりを促す環境づくりを整えた。制作の手順として、活動②では大学教員が準備した絵具の色を園児達に尋ねながら、それぞれの指に異なる絵具をつけ、画用紙にスタンプを行った。白と青を指で採り、水色になるように指をこすりつけながらスタンプを行うことで、園児達から「水色になった！」という声が上がった。その後もピンクやオレンジなどを混色し、一見無造作にスタンプした形がじつは最終的に魚の形になっているという実演を見せた。園児達から歓声が上がったところで、制作が始まった。また、絵具も指だけでなく、掌や手の各部位を使い、具体的なものに見えるように実演して描くことは、園児達の創造力を引き出す妨げになることも予想した。しかし、魚を描く手順として、輪郭を描いて、目や口を描く順序ではなく、スタンプした絵具をランダムに配置しながら、最終的にやや不明瞭な形の魚に見えるように意図的に描いたことで、園児達が真似して描くようなことにはならないと予想した。また、口頭でも魚ではなく自分の好きなように指で描くことを促したことで、魚を意識した表現は制作序盤でやや見られたが、次第に園児達は画用紙に塗布される自身の手形の痕跡に興味が向き、自分達の好きなものを描き始めた。

最初は絵具が指に付着することを嫌がり、ビニール袋を付けて絵具に触れていた園児達もいたが、担任らの補助もあって、次第に積極的に指や手に絵具をつけて描く様子が見て取れた。また、二人の園児が合作で一枚の画用紙に何枚も制作している様子が見られた。これまで数年に渡って行ってきた絵具遊び活動の制作では、個々に画用紙が準備されて制作する場合、他の園児が介入すると非常に嫌がる場面が多く見られた。しかし、今回はお互いの作品ばかりではなく、腕や服に絵具を塗布しあっても、笑顔が見られた。元々仲の良い関係であったかもしれないが、大学教員が知る限り、はじめての経験であった。

さらに別の園児達は「ダーン、ダーン」と二人で声を合わせて、リズムを取りながら、画用紙に絵具を塗布している様子が見受けられた。これもこれまでの年少組の絵具遊び活動ではほとんどなかった事例である【図2】。

活動②では乾燥棚がいっぱいなるほど、多くの作品が制作された。これは全員ではないが、ほとんどの園児が絵具に対する抵抗感がなくなったからだと推察される。

制作後の附属幼稚園教諭と大学教員との意見交換では、絵具遊び活動をやることが楽しみで、早く登園した園児が絵具の前でずっと待っていたことを確認した。園児達の制作への気持ちの高まりを整えるために、今後も絵具の準備等はあえて園児達の前で行い、園児達の手助けを得ながら行うこととした。

はじめは指を使っていた園児も友達の様子を見て、段々と掌に絵具を塗布することを楽しむ場面が見られた。掌に絵具を塗り込み、握りしめ、その手を画用紙に何度もこすりつけ叩く様子も見て取れた。

いずれも友達をよく観察し、真似をすることを楽しむ中で、制作に対してより積極的になっていったことが判明した。

活動③では予定通り、糊を混ぜた絵具を用いた版画を行うこととした。ぬるぬるとした絵具の感触に触れる中で、混色に興味が向いていくかについて観察する。

【図2】絵具の感触を楽しむ様子

3．3　絵具遊びの実践：活動③

活動③は「とろとろえのぐで版画をしよう～フィンガーペインティング～」と題した制作を行った。前回までの活動を踏まえ、絵具の準備を園児達と一緒に行うことで、園児達の活動への気持ちの高まる環境を整えた。

準備物：絵具（白、黄、赤、青、緑、紫）、紙コップ、ビニール袋、画用紙（八つ切り）、ビニール状のテーブルクロス、机、雑巾、乾燥棚

絵具は版画に使用するため、試作を行う中で、絵具１：洗濯糊１：澱粉糊１の割合で混ぜ、絵具一色につき 500ml を目安に事前に準備した。

活動当日は「どんな色になるかな？」と園児達とやり取りして、版画の実演を行った。紙コップに入れた絵具をビニール状のテーブルクロスの上に流し、数色の絵具を指などで混ぜ合わせた。画用紙を上から置き、手で「ぐりぐりぐり」とバレン替わりに動かし、版を完成させた。

園児達は絵具のぬるぬるとした感触に対して、どのような反応をするか観察したが、積極的に絵具に触れる園児もいる一方で、絵具に対して敬遠している園児も見受けられた。

活動③ではこれまでの活動と比較して、制作した枚数が少なかった。これはぬるぬるとした絵具の感触や混色に興味が向き、版画を制作するという意識に向かなかったことが推測される。

その証拠に紙コップに様々な絵具を入れて、混色することを楽しんでいる園児達がいた。その園児達は原色同士を混色することを楽しんでいたが、徐々にすでに混色された類似した絵具を混色することで変化する微妙な色に興味が向き、絵具が紙コップ一杯になるとテーブルクロスに絵具を流して、次の絵具の混色を始めていた。画用紙を渡して、「版画にしてみたら？」と促す場面もあったが、園児達は版画に興味はないようであった。

混色は園児達自身が考えた試行であり実験である。それ以上混ぜると色が鈍くなるという推測や、一人一枚は版画を制作してもらいたいという大人の先回りする感覚は、園児達の探求心や達成感を奪う可能性があるので、今後気をつけたい。

制作の後半では二人の園児が同じ手の動かし方で絵具の混色を行っていた。使用する絵具の色はそれぞれの好みの色を使用しており、お互いに「きれいな色だね」と言葉を交わしていた。

また、手に絵具が付着することに慣れてきたためか、手や腕に絵具を塗布し、ゾンビ手を見せに来る園児達が増えてきた【図3】。指に絵具が付着することを敬遠する園児はビニール袋越しに制作をしていたが、最終的にはビニール袋を外して、直に絵具の感触を確かめて制作している場面も見られた。ぬるぬるとした絵具の感触を体験することは、部屋を汚してしまう可能性もあり家庭では難しいと推測される。こういった五感を使う経験は大切なことなので、継続して行っていきたい。

原色による混色に慣れてきており、より微妙な色の変化に興味が向いてきたと考えられるので、次回は原色ではない絵具の検討を行うこととする。

制作後の附属幼稚園教諭と大学教員との意見交換では、担任の視点からも、始めはおそるおそる指で絵具を触っていたが徐々に慣れてきており、前回よりも絵具を手に付けるのが大胆になってきたとのことであった。また、絵具を

手で混ぜながら「色が変わった！」と喜んでいる園児や、版画に写し取る際に友達が作った色も写って驚いている園児もいたようである。

環境設定として、園児は紙コップに入れた絵具を一度に全部使おうとするため、紙コップを多めに用意しておき、絵具を少しずつ入れると混色に発展性が得られるとのご意見をいただいた。

【図3】ゾンビ手でポーズする園児

3．4　絵具遊びの実践：活動④

活動④では「大きい紙に思いのままに描こう」と題し、筆による制作を題材として設定した。

準備物：絵具（白、黄、赤、青）、筆、絵皿、画用紙（四つ切り）、机、雑巾、乾燥棚

これまでの活動と同様に絵具の準備を園児達と一緒に行うことで、園児達の活動への気持ちの高まる環境を整えた。大学教員がトロトロした原液の絵具の特徴や、筆を見せながら「これは何ていう道具か知っているかな？」等、園児達との会話の中で、絵具を用いた制作の実演を行った。

絵具については活動③の検証として、より微妙な色の変化に興味を持ってきたことを指摘した。園児達はこれまで混色によって多くの色を作ってきており、逆に少ない色数でもより混色を工夫することが想定されたため、これまでで最も色数の少ない白、黄、赤、青の４色に設定した。

実際の制作では、これまでの活動で作った色数以上に様々な色を作っており、意図的な混色や、他の園児達と絵皿を共有したことによる意図しない混色も含めて、最終的に自分なりの繊細な色彩を画面に塗布している様子が見て取れた。

活動④では今年度の絵具遊び活動としてはじめて筆を使用することとした。９月に行われた幼稚園実習において園児達ははじめて筆を使用し、水分を多めにした絵具を用いて制作したようである。そのため、活動④では絵具に水を加えない原液を用いることで、筆致の面白さを体験できると想定した。

実際の制作では筆に含ませる絵具の分量を調整することによって、カサカサした質感や、絵具による絵肌の工夫が見られた。これは水の分量が多い絵具ではできない表現である。絵具の塗布による絵具層の堆積に興味を示した園児もおり、同系色に色を何度も塗布している様子が見られた。完成した作品を乾燥棚に運ぶ際、これまでにないほどの絵具の重さを感じる作品まで制作していた。

筆致の面白さに気付き、「ポンポンポン」と筆の跡を画面に付ける度に声を出して、制作していた園児もいた。これまでの制作では八つ切りの画用紙を用いていたが、今回の制作では四つ切の画用紙を使用した。また、筆を用いたことにより、物理的に制作の範囲が広がり、大きな線や、円、三角形など、より躍動感のある筆勢や筆致が見られた【図4】。

ある園児は他の園児が作った緑色の絵具を見て、「先生、みどりの絵具ちょうだい。」と尋ねたので「今日は無いから混ぜて作ってみたら？あの色もお友達が作ったんだよ。」と言ったところ、自分なりに絵具を調合して緑色を作り、「できた！」とうれしそうに塗布していた。これは、絵具遊び活動の醍醐味であり、色（明度・彩度・色相）が混色により変化することを直覚的に知る体験となっている。換言すれば、このような声掛けが園児たちの自由な表現を助長することに寄与し、色彩への審美的な目覚めを促すと考えられる。

指で絵具に触れることを敬遠する園児達にとって、筆を使用したことによって、活動に対する障壁を取り除く一助となったようである。ある園児はこれまでの活動で必ずビニール袋を付けて制作しており、制作した作品も画面の一部への絵具の塗布に留まり、余白が多い作品が多かった。しかし、活動④では筆を用いたことにより、画面の一部への絵具の塗布ではなく、画面全体を埋め尽くすほど絵具を塗布しており、一度塗布した場所も何度も色を混色して塗り替えていく様子が見て取れた。これまでにない積極的な姿勢が見られ、色の微妙な変化への興味や筆に含ませる絵具の調整など様々な工夫が見受けられた。

完成した作品は友達同士で鑑賞し合い、幼稚園教諭に見せて自らプレゼンテーションしている姿もあった。そのプレゼンテーションからは色彩の調和やフォルム、連想するモチーフ等を大切にしていることが分かった。このような園児達の作品への能動的な関わりに対して助力していく

ことも肝要であろう。

【図 4】大きく手を動かしながら制作する様子

4．まとめ

本研究において、絵具遊び活動を通して、園児自身が考え、思いつくままに表現できる方法の検討を行ってきた。はじめは個々の表現に集中していたが、回数を重ねる度に、制作や作品などを通して、他の園児の関りが見受けられるようになった。

活動②でお互いの作品ばかりではなく、腕や服に絵具を塗布しあっても、笑顔が見られる事例や、二人で声を合わせ、リズムを取りながら、画用紙に絵具を塗布している事例が見られた。これは単なる制作を超えて、絵具を通したコミュニケーションに昇華したことが指摘できる。

前述した通り、コロナ禍の影響で入園したばかりの今年度の年少組は砂遊びをする園児が少なかった。しかし、担任の話では活動④を行った 10 月末時点では砂遊びをする園児が多くなったとのことであった。

アートの日で園児達と一緒に絵具の準備をする際に、「先生、一緒に行こう！」と声を掛けられ、ダンゴムシを探す、色水に使用する花を探すなど、園児達の興味の幅が広がり、砂や土、昆虫等に触れることに対する抵抗感がなくなっている。それに伴って本稿の絵具遊び活動においても、徐々に絵具を素手で触れる園児が増えていき、活動④においては筆での制作であったが、これまでの中で最も積極的な制作の姿勢が見られた園児もいた。

今後の課題として、土井・橋本（2022）が提唱している土砂や葉を用いた顔料の検証を踏まえ、自然豊かな附属幼稚園の特色を活かした顔料の検討を行いたい。とりわけ土砂は日本画の岩絵具の粒子を分ける水簸分級を行うことで、複数の色に分解することが出来、さらに熱を加えることによって色味を変化させる可能性がある。身近な素材を使用して、はじめの段階から園児達と一緒に顔料を作ることができればより教育効果の高い活動となる可能性を秘めている。

また、附属幼稚園において行っている絵具に関する活動を附属小学校と連携して行いたいと考えている。これまで附属小学校との共同研究を行っていなかったが、次年度からの共同研究の体制を整えている状況にある。そこでは附属幼稚園で行っている絵具遊び活動ではなく、附属小学校のカリキュラムに合わせた活動を行っていきたいと考えている。

謝辞

本研究は学長裁量経費「アートマネジメント人材の育成-地域に根ざす新しい芸術教育のプラットフォームづくり-」、学部長裁量経費「絵具遊び活動に関する実践的研究」等の助成を受けました。記して感謝の意を表します。

引用文献

伊藤七男・茂木克浩（2020）：幼児期の造形表現体験と中学生の美術科に対する意識との関連,足利短期大学研究紀要, 第 40 巻,第 1 号,19-26

浜谷直人（2015）：描画発達理論を拡張する：子どもの絵の苦手意識と保育実践の関係,心理科学,第 36 巻,第 1 号,1–9

文部科学省（2018）：幼稚園教育要領解説 https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/you/nerai.htm（最終閲覧 2022 年 11 月 1 日）

土井徹・橋本茉実（2022）：自然物を活用した手作り絵の具を作製する方法に関する検討安田女子大学紀要,第 50 号,149-156